

競技コースはこうして作られた

スキーオリエンテーリング世界選手権 2009 の舞台裏

コースプランナー
高島和宏

ほとんどの読者の方は、どのようにスキー0のコースが作られるか、未知の世界であろう。同じオリエンテーリングとは言え、フットとは全くその手順は異なる。

曲者は「スキートラック」

フット0と大きく異なるのが、地図の「緑版」。「通行可能度を示す」という意味では、ある意味同じだが、フット0では主に下草等の状態により、走りやすさをあらわすことになるが、スキー0では、主催者で事前に圧雪車やスノーモービルで整備したスキートラックの整備状況(幅員)を示す。そして、コントロールは、全てそのスキートラック上に設置しなければならないルールとなっている。



雪上車も登場。

このほかに大型ピステマシン(幅6m)が毎朝のスキー場の整備が終わって、テレインのメインコースを圧雪作業する。このためコントロールは幅広雪道の真ん中には設置できない。

トラックが先か、コントロールが先か、それが問題

コースセッターは、ベースとなる0-MAPを見ながら、コントロール位置だけではなく、スキートラックのネットワークをどのように組むかも同時に考えなければならない。

フット0と同じく、競技的に魅力あるコースとなるようにまずは、机上で構想を練る。その後、大会3ヶ月前の12月に現地入りし、スキートラックの整備がスノーモービル等で可能かどうか、スノーシューを履いてテレイン内を駆け回った。

いくら、コントロールを置きたくても、そこに至るスキートラックが整備できなければ、設置できないのである。しかも問題となるのは、地図には表れない「段差」と「雪庇(せっぴ)」である。高さ2mの段差があった場合、フット0であれば、簡単によじ登ることができるので、コース設定上何の問題もないが、スキー0では、この等高線で表れていない段差も致命的である。スノーモービルは登れないからである。

また、同じ林でも木の密度が濃い場合、スノーモービルが通る幅が確保できないと、そこにスキートラックを設置することもできない。もちろん、危険な雪庇は避けなければならず、これから先、3ヶ月で成長するであろう雪庇の状況を地形や風向きから判断して、それらも考慮に入れる。そして、作成したコース案をイベントアドバイザーであるコルティニエミ氏(フィンランド)へ電子メールで送付した。

日本とフィンランドの環境の差

イベントアドバイザーから返信されてきたコース修正案は、驚くべき内容であった。送られてきたのは、深い谷底、急峻な斜面はもちろんのこと、橋のない箇所での渡河などがふんだんに入ったコース修正案である。

フィンランドは平らで湿地や川が多い地形であり、スノーモービルで登れないような斜面はほとんどなく、雪庇などとも無縁の国。川や湿地は、冬になれば凍り、どこでも渡れるのが北欧。

でもここは、日本。雪は一晚で何十センチも積もり、谷底は深い雪だまり、川が凍ることは無く、雪が覆いかぶさっていても上に乗ったら崩れて川に落ちるような状況である。

いくら説明しても、その溝は埋まらず、大会期間を迎えることとなってしまった。今になって思えば、単なる環境の違いだけでなく、そもそものコンセプトにずれがあったことも、その要因であった。

日本側の実行委員会では、初めてのスキー0アジア開催であるため、「競技の成立」を第一目標に置いていた。このことから、コースセッターとしては、少ない運営人員と予算の中で確実に競技を成立させるためには、運営負担が軽くなるようなコース設定を行うこと

がベストと考えていた。

これに対し、イベントアドバイザーは当然ながら世界選手権という大舞台として相応しいコース設定を念頭においているため、例えスノーモービルの通行が困難な箇所にもスキートラックを整備することを要求してきていたのである。イベントアドバイザーとして、当然の考え方であり、このような自分に甘い運営者に喝をいれるためにIOPから派遣されているわけである。

日本の雪に勝てるのか!?

このルストツ史上初となる難コースの整備に当たるのは、日本一豪雪地帯といっても過言ではない山形県真室川町の高橋仁紀隊長+フィンランド助っ人3名である。コースセッターの現地入りよりも1週間先に現地に入り、スノーモービルでテレイン内を走り回って

くれた。内心、「どうせ音を上げて、元の私のコース案になるに違いない」と思いつつ、現地入りして「驚いた!」。ほとんど、予定通りコースが整備できて

いる!恐るべき、フィンランドパワー。しかし、様子がなんかおかしいことに気づいた。モービル隊長は、すでに疲弊しきっている。。。さらにルストツリゾートのスノーモービル機材責任者である信原氏は、怒りを爆発させている。。。。

最高に整備されたスキートラックの代償として、ルストツリゾートから借りていたスノーモービルが多数犠牲となっていたのであった。



今回コース整備に使用した排気量250ccのスノーモービル。普段はルストツリゾートのスノーモービルアクティビティ用に使用されている。

圧雪されたコースを走るには充分だが、新雪・急斜面で無理をするとオーバーヒートしたり横転したりで破損する。今回のフィンランドの助っ人の乗り方は荒っぽかったようだ。

コントロール設置は、篤職

スキートラックが決定されたら、次は、いくつあるのかすら把握できていない山のようなコントロール設置作業である。その作業にあたるのは、橋、武石、木村、高島のベテラン（老体？）4名。

フット0のようにフラッグつけたパンチ台を地面に挿せばOKというわけにはいかないのが、スキー0の泣き所である。スキートラックを横切るように横ひもを張ってフラッグやユニットを吊り下げなければならない。写真を参考にさせていただきたいが、パン食い競争を思い浮かべていただければよいだろう。

この設置にもものすごい労力と技術力が要求されるのである。当然ながら、読図能力はもちろんのこと、コントロール位置まで機材を持って到達できるだけのスキー技術やスノーモービル運転技術が必要である。簡単に誰でもできるような作業ではない。



木と木の間にロープを張り、そこにフラッグとコントロールユニットを取り付ける。スノーモービルを木に寄せて停車させ、足場にする。

しかし、そこでまたもやイベントアドバイザーからの強い指令が下った。「横紐の雪面からの高さは、210cmを確保せよ」。海外選手には身長2m近い選手も少なくない。通過する上で支障のない高さと言うことで、この高さは確かに必要であることはわかるが、設置担当メンバーの身長は、全員160cm程度である。とても手が届かない。。そこで、木登り、投げ縄、そして脚立までもが登場し、建設現場のどび職チームさながらの設置作業が行われた。準備期間中、何回木に登ったことだろう。もう、こんなに木登りすることも一生ありえないと感じた。



木のない雪原にコントロールを設置するときは竹でゲートを組みあげてフラッグとパンチングユニットを吊るす。

竹組み作業ではモービル2台を使うと作業性がある。問題はモービルの運転能力。



竹は素晴らしい素材。軽くて強くて安い。これが日本式「バンパーコントロール」だ。アウトドアの基本「ロープワーク」を実践

驚速プリンタ大活躍

コントロール設置の次は、地図作成である。フット0であれば、通常、コントロール設置前に地図は先にできているが、スキー0では、時々刻々と変化する積雪状況とスキートラックの整備状況の変更により、レース前夜に最終コースが確定するのが通例である。しかも、今回はフィンランド助っ人メンバーが最終段階まで、競技コースを練って修正を加えていたために、前夜の段階で、「やはり、ここにコントロールを一つ付け加えよう。明日の早朝に設置しておいて。」という無茶苦茶な要求もしばしば。そこで、議論(口論?)になってしまうと、どんどんと世は更けていったのであった。

結局、大会期間中に前日までに地図が仕上がったことはなく、当日の未明になって初めて印刷が開始されるという自転車操業であった。

しかしながら、そこで活躍したのがエプソン業務用プリンタPX-B300である。地図印刷用の高精細モードでも、2分程度で1枚が印刷できるため、2、3台の並列印刷で早朝にはちゃんと地図印刷を完了させることができた。これが普通のプリンタであったら、スタートに間に合っていなかったであろう。逆に言えば、そのプリンタ性能に甘ん

じて、直前まで地図修正を許していたと言う意味にもなるのだが。。。



役員部屋で煮詰まっている高島半分寝ているようにも見える。背後には業務用プリンタが3台見える

自転車操業のルーチン作業

結局、運営者でありながら選手が滑っているのを見たのは、最終日リレーのスタート風景のみであった。

期間中、毎日、コントロール設置(夕方)→地図印刷(深夜)→コントロール確認(早朝)→睡眠(昼:競技中)→(はじめに戻る)の繰り返しである。同じ地で世界選手権が行われているのに、眠い目をこすりながら、作業部屋からネットでリアルタイムリザルトを観戦するというまるでいつもの北欧で行われている大会と同じ状況であった。言われてみれば、ほとんどフィンランド助っ人メンバーが主導権を握っているようにも思われた。

力作はネットで公開中

なにはともあれ、無事に大会は成功裏に終了した。実は、ロング競技の際に違うパターンの地図を印刷してしまうミスを行っていたのだが、好意により助けられると言う場面もあり、ぎりぎりの運営状況であったことは確かであった。全種目の競技地図と選手ルートは、専用Webサイト「ルートガジェット

<http://joa.tm.land.to/gadget/>

にて公開しているの、是非見ていただきたい。また、ネットプリントやオンラインダウンロード販売も実施している。

(高島和宏)